

木村正俊 編

『文学都市エディンバラ—ゆかりの文学者たち』

千葉：あるば書房、2009、4600円、391頁。

宇田朋子

エディンバラは文学都市であり、エディンバラと関係の深い文学者がたくさんいる。エディンバラに生まれ育った文学者もいれば、生まれ育ちは違っても、エディンバラに足しげく通い、最終的にエディンバラに根付いた作家、逆にエディンバラから脱出した作家、エディンバラとは一見無関係のようであっても、エディンバラにインスパイアされた文学作品を書いた作家など。本書では、そのような「エディンバラと顕著にかかわりの深い文学者一六人を選び、その多様なかわりがいかに彼らの文学世界の構築に作用したのか、そこからいかなる価値を持った作品が産出され、それがどのような影響を及ぼしたのか」(p.2)という視点から書かれた作家論である。

序章「文学者にとってのエディンバラ—想像力を喚起する都市—」木村正俊、第一章「アラン・ラムジー—スコツ語を守った詩人・劇作家—」照山顕人、第二章「ジェイムズ・ボズウェル—伝記とともに生き続ける作家—」江藤秀一、第三章「ロバート・ファーガソン—夭折したオールド・リーキーの詩人—」米山優子、第四章「ロバート・バーンズ—栄光の中での自己発見—」木村正俊、第五章「ジェイムズ・ホグー—「近代のアテネ」の栄光の陰で—」金津和美、第六章「ウォルター・スコット—中心にして境界に位置した作家—」松井優子、第七章「トマス・ド・クインシー—雑誌寄稿に徹した散文の達人—」木村正俊、第八章「トマス・カーライル—苦悩・回心・愛の道のり—」向井清、第九章「チャールズ・ディケンズ—エディンバラの二人の父—」武井暁子、第一〇章「ロバート・ルイス・ステイヴンソン—光と混沌の街エディンバラを愛す—」立野晴子、第十一章「アーサー・コナン・ドイル—名探偵ホームズを生んだ男—」田中喜芳、第十二章「ジェイムズ・マシュー・バリー—ネヴァーランドへの漂着—」阿部陽子、第十三章「ヒュー・マクダーミット—二〇世紀スコットランド文学の巨星—」中島久代、第十四章

「ミュリエル・スパークーエディンバラからの亡命―」松本真治、第一五章「ジョージ・マッカー・ブラウンーオークニーの針の目を通して―」山田修、第一六章「アーヴィン・ウェルシュとイアン・ランキンーウェルカム・トゥー・エディンバラ―」横田由紀子、およびエディンバラ地図などの資料で構成されている。第一六章ではアーヴィン・ウェルシュとイアン・ランキンの二人を扱っているため、正確には17人の作家が本書では扱われている。中には、ディケンズのように、ロンドン文学の申し子だと思われる作家も取り上げられている。だが、本書ではディケンズとエディンバラの関係を、文学的というよりは伝記的な点からあぶり出している。

序章では、中世から現代までのスコットランド文学の概要、エディンバラという都市の成り立ち、およびエディンバラ大学が担う役割の大きさについて、19世紀スコットランド文学を語る上で欠かすことのできないジャーナリズムの存在について、またパブの担う役割について言及されている。この章では、なぜディケンズが本書で扱われているのかについての説明もある。ディケンズはイングランド生まれで、スコットランドに住んだことはない。だが、1834年『モーニング・クロニクル』の記者として、初めてエディンバラを訪れた時から、彼とエディンバラの関係は始まった。ディケンズの妻がエディンバラ出身であり、岳父ジョージ・ホガースはジャーナリストであった。「ディケンズが作家として名をなすには、この岳父の力が大きかったことを忘れるわけにはいかない」(p.21)と、木村氏は論じている。

1707年、スコットランド議会は解散し、イングランドと合併することになった。1715年ジャコバイトの反乱も失敗に終わり、スコットランドは大英帝国の一部となった。そのため、スコッツ語は廃れていき、英語の使用が一般的となっていく。その流れに対抗し、古き良きスコットランドの伝統を残していこうという活動を始めたのが、第一章で扱われているアラン・ラムジーであった。ラムジーは中世スコットランドの詩やバラッドを集めた『エヴァー・グリーン』を上梓したり、自らもスコッツ語で詩作し、発表した。また、彼が残した大きな業績は、有料の貸出図書館を設立したことだった。これにより、エディンバラの庶民は、安価で様々な小説や詩、戯曲などに触れることができるようになったのだった。彼の功績をたたえた像が、現在プリンスィズ・ストリートに建っている。

ラムジーに続く、スコッツ語を用いた詩人が、第三章で取り上げられているロバート・ファーガソンである。スコットランド文学に詳しくない人にはあまりなじみのない名前かもしれないが、エディンバラ城からホルルーダハウス宮殿へと続くロイヤルマイルにあるファーガソンのブロンズ像は、エディンバラを訪れる観光客にはおなじみのものである。ファーガソンは、晩年のわずか2年に82編の詩を残している。その中で、スコッツ語で書かれたものはわずか30数編にすぎない。だが、現在ファーガソンが知られているのは、スコッツ語で書かれた詩のお陰である。スコッツ語詩の標準詩形である「標準ハビー・スタンザ」を用いたこと、そして何より、時折方言を用いながら、庶民の姿を生き生きと描いたこと、これらが第四章で扱われるバーンズなど、後世の詩人たちに大きな影響を与えたのだ、と筆者は論じている。ファーガソンのブロンズ像の足元には、彼が晩年に書いた長編詩「オールド・リーキー」の冒頭が刻まれている。オールド・リーキーは、エディンバラの別名である。

「蛍の光」で有名なバーンズは、田舎の詩人である。彼がエディンバラで過ごしたのは、累計でわずか2年に過ぎない。その間、スコッツ語の詩人としてもてはやされた一方で、結局のところ自分は農民詩人に過ぎず、都会の社交界にはなじまない、と感じた。都会の知識人たちと交流している間、最初は農民を描いた詩がもてはやされたのだが、しばらくするとその才能を更に生かすためにスコッツ語ではなくイングランド語で詩作したらどうか、と勧められるようになった。バーンズがエディンバラの知識人たちに対して失意を覚えたのも無理はなからう。「エディンバラに寄せる言葉」でバーンズが「スコットランド最愛の首都よ」とうたった大都会でバーンズが得たものは、「スコットランドの伝統文化の再発掘と再生への仕事に打ち込む姿勢の確立である。エディンバラでの体験を通して、バーンズの意識は確実に変容し、新たな自己を起動させた。」(p.101)と、筆者は結論付けている。

さて、ギヤスケルを研究する者にとって興味深い章は、第二章のボズウェルや第九章のディケンズであろう。ボズウェルは、何とんでもドクター・サムユエル・ジョンソンとの交流から生まれた、『ジョンソン伝』で知られている。イングランドの叡智ドクター・ジョンソンとボズウェルは、30歳以上も年が離れて

いる。大男にして「大熊」のあだ名があるジョンソンと、幾度もうつ病に悩まされた繊細な神経の持ち主であるボズウェルがどのようにして交友を深めるに至ったのか、そしてボズウェルはどこにひかれてジョンソンに師事するようになったのか、本書では詳しく述べられている。驚くべきは、ボズウェルが実際にジョンソンと会っていた時間は、のべにして1年程度であるということだ。また、ボズウェルがジョンソンと出会ったとき、ジョンソンはすでに53歳になっていた。75年の生涯のうち、後半五分の一程度しか知り合っていなかったのだが、それにしては『ジョンソン伝』はジョンソンの生涯にわたる記述にぶれはなく、読者はギャップに気付かない。ボズウェルは、知り合う前のジョンソンについて、ジョンソンの知人友人から直接聞き取りをし、彼らの手紙を利用することによって、記述のギャップをなくしているのである。このようなボズウェルの手法は、ギャスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』を著したときの参考になったであろう。

また、ギャスケル研究者にとって、ジョンソン博士、といえば、『克蘭フォード』に登場するミス・ジェンキンズの愛読書としてなじみ深い名前である。ミス・ジェンキンズはジョンソン博士の文体は若い初心者のお手本になるといい、自らもジョンソン博士の文体を真似たような堅苦しい文体の手紙を書く。ミス・ジェンキンズのジョンソン博士に対する敬愛ぶりは、読者に笑いを誘うほどである。ブラウン大尉がボズ（ディケンズ）を愛するのと好対照をなす。ミス・ジェンキンズとブラウン大尉はお互いに自らの好みを譲らず、議論になるのだが、ブラウン大尉がボズの作品を読んでいる最中に鉄道事故で亡くなった、という報を聞いたミス・ジェンキンズが「お気の毒に。あんなものに夢中になるなんて。」というセリフを言う場面は、センチメンタルなペーソスとともに、ほのかなユーモアを感じさせるものである。

一方のブラウン大尉が好んだ作家、ボズことチャールズ・ディケンズは、ギャスケルが作家として成功するうえで重要な鍵を握る人物である。ギャスケルは、ディケンズが編集を務めていた『ハウスホールド・ワーズ』に多くの作品を寄稿し、人気を博したからである。

本書では、ディケンズとエディンバラの関係を「ディケンズの駆け出し時代から作家としての地位を確立するまでにおけるエディンバラとの関わりを、かの地が登場する作品の時代背景を検証し、ルーツをもつ先輩、ホガースとジェフリー

との交流を中心に考察した」(p.210)のものである。ヴィクトリア朝を代表するイングランドの作家ディケンズがその地位を確立する前、岳父ホガースの影響でエディンバラの知識人たちと知り合い、その交流を通してエディンバラで作家としての地位を確立したことが、詳細に検証されている。だが、ディケンズが作家として成功を収めるにつれ、妻キャサリンとの仲も微妙になっていき、妻の実家ホガース家からは経済的な頼りにされる事態となり、ディケンズとホガースとの関係は変化していく。エディンバラで多くの知識人と知り合い、作家としての基礎を築いたにしては、作品にエディンバラが登場することは1度しかない、という理由は、このあたりにあるのかもしれない。

そのほか、ギヤスケルと関係がある文学者としては、トマス・カーライルが扱われている。『衣装哲学』を代表作とする哲学者であり文学者であるカーライルは、その文体から極めて難しい人物であると想像しがちである。だが本書では、若き時代に自分の目指す道を見出せずに苦悩する姿や、一生涯愛することになるジェイン・B・ウェルシュとの出会いと情熱的なラブレターの交換、そして結婚してからも常にカーライルの良き理解者であったという二人の関係にスポットを当て、作品のイメージとは異なる人間・カーライルの姿を論じている。また、最後にはカーライルの死後、カーライル評価がどのように変わっていったのか、特に第2次世界大戦時において、カーライルの思想がビスマルクからヒトラーへと続くドイツ軍国主義の先駆けをなす、と批判の対象になったことも言及されている。だが、現在エディンバラ大学にカーライル協会が置かれているように、カーライルの研究にはまだまだ議論の余地がある、と筆者は結論づけている。

余談となるが、本書ではカーライルとエマソンの交流についても言及されている。最初は意気投合した二人であったが、14年後再会した時には、カーライルはラディカルな社会思想をもつようになり、エマソンは穏健な神秘思想主義者へと変貌していた。そしてその際エマソンはマンチェスターでも講演会を行い、ギヤスケルはそれを聞きに行き、そのレポートを『ハウイツ・ジャーナル』誌に寄稿した。

また、ウォルター・スコットを論じている第六章も興味深い個所である。スコットランド文学におけるスコットの偉業を一番よく示しているのが、エディンバラの目抜き通りであるプリンスィズ・ストリートの東端にそびえたつスコット記念

塔であろう。スコットといえば、数多くの歴史小説で有名である。中でも『ウェイヴァリー』から始まる一連の作品群は、『ウェイヴァリー叢書』と総称され、この時代のブリテンの他の作家の作品すべての総計を凌ぐ売り上げを誇るなど、当時の英国のみならず、ヨーロッパ諸国や後世の作家たちにも大きな影響を与えた。歴史物語というジャンルを確立したわけだが、ギヤスケルが『シルヴィアの恋人たち』で描いたモンクスヘイヴンの場面などに、スコットの作品の影響が見られる。

その他にも、奇しくも同時期にエディンバラ大学で学んでいた三人、ロバート・ルイス・ステューヴンソン、アーサー・コナン・ドイル、ジェームズ・マシュー・バリについて、それぞれ第一〇章、第十一章、第十二章で論じられている。それぞれ異なる視点から論じられていて興味深い。また、現代スコットランド文学を担ってきたヒュー・マクダミッドやミュリエル・スパークを論じている章も、直接ギヤスケル研究との結びつきは少ないかもしれないが、興味深いところである。

それぞれの章を異なる研究者が担当しているため、たとえば『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』を『マガ』という通称を使う章や『ブラックウッズ』という略称を使う章などばらつきがみられたり、ジェイムズ・ホッグの『許された罪人の手記と告白』とトマス・ド・クインシーの『阿片常用者の告白』を共に『告白』と略したりという混乱がみられることもある。また、エディンバラのオールタウンとニュータウンの環境や建設について、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』(のちに『ブラックウッズ・マガジン』に改称)と『エディンバラ・レビュー』とトーリー党とホイッグ党の関係など、説明がいくつかの章で重なるところがみられる。そのため、一冊を通して読むよりも、それぞれの章を独立したものとして、順番をあまり気にせずに気に入ったものから読んでいくのも面白い。

それぞれの担当者が作家とエディンバラ(ひいては広くスコットランド)との関係を視野に、ある章では自伝的に、またある章ではもう少し広く文学作品の面から論じており、一見まとまり感が薄いようにも感じられる。だが、編者の木村氏が序章で述べておられる通り、本書を読んでいるうちに、文学「都市エディンバラのもつ計り知れない多重性と奥深さ、そこから湧出する活力と勢いが明確に」(p.3)感じられるようになってくる。

ただ、ギヤスケル協会の会員として、非常に残念に思うのは、この素晴らしい研究書に、ギヤスケルの名前が一度も言及されていないことである。ギヤスケルといえばマンチェスターやナッツフォードがすぐに浮かんでくるのだが、実はエディンバラともなかなか関係が深い作家である。ギヤスケルは娘時代にエディンバラで過ごしたことがあったし、後に作家として大成する前、「貧しい人々のスケッチ」と題した詩を夫のウィリアム・ギヤスケルと合作し、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に掲載されている。

いずれ、本書の続編となるべき書が上梓される日があれば、その時にはぜひギヤスケルにも一章割いてもらいたい、と思わずにはいられなかった。

(聖徳大学短期大学部准教授)

